
Fate/Gold Saint 黒炎の姫君

九条 水菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/Gold Saint

黒炎の姫君

【Zコード】

N6434Y

【作者名】

九条 水菜

【あらすじ】

「一緒に世界を壊そうぜ?」 … 第五次聖杯戦争も終結し座に戻つたサーヴァントたちに、受肉させ新たな命を与えた男がささやく
… 「消失したアテナを探し出せ!」 … 聖戦も終わり復活した黄金聖闘士達に下される教皇からの勅令… Fate/stay nightと聖闘士星矢がクロスオーバーした世界……鉄骨の下敷きになつて死んだ少女が目覚めた世界はそんな世界だった…

世界観について

どうも。九条水菜と申します。

さて…まあは、この世界の説明をしたいと思います。

舞台となるのは基本的にFate/stay nightの冬木市です。

…衛宮たちが3年生に進級したところから話を始めます。

第5次聖杯戦争はアニメ版沿いで進んだだという前提で話を進めていきます。

…本編でも書きますが、この話では、ある人物によつてサーヴァントが座から再び蘇生されます。

召喚ではなく蘇生です。8人のサーヴァントは皆、座から切り離され、肉体を持った状態で蘇生されます。

つまり、座から外れたので、『各々の知名度』に縛り付けられていません、本来の力が發揮できるようになつていれます。

あと、ストーリー上の関係で、葛木先生は生きていますってことで、お願いします！

次に、この世界はただの *Fate* の世界ではなく、一種の平行世界……です。『聖闘士星矢』の世界観が入っています。

星矢サイドでは、聖戦が終了し、『星矢を生き返らせたい』一心の沙織嬢が、三界会議を開き、星矢のついでに黄金聖闘士+を…それならばとハーデスがパンドラと冥闘士、ポセイドンは海闘士を復活させたということになっています。

聖戦が終わってから2年後なので、青銅たちも成長し、一輝と紫龍が穂群原学園の生徒として登場します。……ですが、一輝に関して言つと、放浪癖が激しいせいで留年をして紫龍と同じクラス…ということになっています。

ですが、話に絡んでくるのは主に黄金聖闘士です。

前聖戦に関してはしtocを元にして進みたい思います。

次に遊戯王に関するのですが、これは現実世界とあまり大差ありません。

デュエルディスクにカードをセットしたらモンスターが！…つてことになるのは、異界から来た主人公のデュエルディスクだけです。精霊が宿るのも主人公のカードだけです。

ペガサスや海馬…遊戯は存在していません。

デュエルモンスターズというゲームを生み出したのはグラード財団

ところになっています。

：原作のM&Wの名前で、少しほそ社会現象になつていて、世界大会だけでなく様々な大会が行われています。ちょっととしたスポーツみたいなノリ…というのが適當かもしません。

なお、本編で決闘シーンは少ないです。

まあ…世界観はこんな感じです。

初見読者にも分かるよう、『Fate』や『星矢』や『遊戯王』を知らないでも読めるように書いていくよに心がけます。

『…んとこどりなつてんの？』つと書ひとどがありましたら、お気軽に感想を書いてくれると嬉しいです。

結構、捏造が多く、血口満足的な話ですが、よろしくお願ひします。

プロローグ（前書き）

えつと……まだ、Fat eキャラも聖闘士キャラも登場しません。

オリ主主人公の前世シーンです。

プロローグ

1人の大人しい雰囲気の少年と、1人の大学生くらいの白髪でボイッシュな感じの女が、公園で向かい合っていた。

まだ時間が早いので、2人が対峙する公園にはジョギングをしている人や、散歩に来ている年寄くらいしか見かけない……

だが、彼らが腕に付けている機械を見た者は、たとえジョギングをしていたとしても立ち止り、うつらうつらしてたとしても意識を2人に向けた。

「『デュエル決闘!!』」

2人の声が重なり合つたとき、一陣の風が公園に吹き……空気はまるで戦場のような張りつめたものとなつた。

少年 L P 4 0 0 0
女 L P 4 0 0 0

「いくよ、ねえちゃん!僕のターン、ドローカード……」

少年が勢いよく、腕についている機械『デュエルディスクからカードを引き抜いた。

「……僕は魔法カード『超進化薬』を発動！これでこれから3ターン、僕はレベル関係なく恐竜族モンスターを召喚できるんだ！！

来い！！『アルティメットティラノ究極恐竜』！――！」

少年が声を張り上げ、恐竜の書かれたカードをデュエルディスクにセットする。

何の変哲もなかつた、ただの公園の地面が割れ……つといつてもソリットヴィジョンシステム……いわゆる幻影の産物だ……つと分かつていても、漆黒の肉食恐竜が雄たけびを上げる姿は、鳥肌ものである。

究極恐竜 攻 3000

「僕はこれで終わり。花凜ねえちゃんのモンスターの上限は3000だよね？」

つまり、これを倒すなら相打ち覚悟じゃないといけないし、1タ一

ンで『コレを越えるモンスターを2対以上、召喚できるわけないよ。』

少年は誇らしげに言った……が、花凛つと言われた白髪の女は、やれやれ……つと言つた感じでカードを引く。

「アタシは『魔法カード』『天使の施し』を2枚発動。6枚引いて、4枚墓地へ送る……その時に『暗黒魔族ギルフアーティモン』を送ることで、効果発動！」

このカードが墓地に送られたとき、相手モンスターの装備魔法について、500ポイント攻撃力を下げることができる。」「し……しまった！！」

究極恐獣 3000 2500

「で……でも、2500級のモンスターなんて……」「墓地にいる『トラゴエティア』『マシュマロン』を除外して、特殊召喚！『カオスソルジャー 開闢の使者』……」

青い衣をまといし騎士がフィールドに降臨された。

「さりに、『ホルスの黒炎竜』×4』を通常召喚する。」

白銀の人一人くらい乗れそうな鳥がフィールドに舞い降りた。

カオスソルジャー 開闢の使者 攻 3000

ホルスの黒炎竜 L V 4 攻 1400

「ま…まずい…！」

「じゃあいぐぞ。まず、開闢の使者の攻撃！！『開闢双破斬』！！」

自身の体の倍以上の恐竜をいとも簡単に切り裂く開闢の使者。

「うわっ…！」

少年 LP 4000 3500

「さりに、効果で連続攻撃が出来る…つまり……開闢の使者とホルスでダイレクトアタック！！

『时空突刃・開闢双破斬』！！『ブラック・フレイム』……

「わ…わああああ…！」

少年 LP 3500 0

少年はがつくしつなだれた。

「サンキューな、ホルスもカオスソルジャーも」

花凜はにつこり彼らに笑いかける。

『当然の事をしたまでだ』

『あ～～あ、もつと暴れたかつたんや～～』

つと花凜にしか聞こえない言葉……精霊の言葉をしゃべると、精霊界へと消えて行つた。

「…あ～あ…今日こそはねえちゃんに勝てると思つたの…」
「ふん…まだまだ太一に負けるつもりはないっての。
ほら、帰るよ。ギャラリーがこのままだと増えりやうしな。」

太一と呼ばれた少年は、周囲を見てから、うなづいた。

「…つたく…ねえちゃん有名人だよな…」

ギャラリーが何か言つてくる前に、小走りで公園を走り去る2人……

太一の姉…花凜は有名人だ。

デュエルアカデミア大学部の2年生で将来を有望視されているデュエリストだ。

シンク口召喚が主流と言われ、最近ではまた新しい召喚方法が出てきているらしいこの情勢で、いまだ『ホルスの黒炎竜』を使い続け、アジア大会の準優勝者にまで上り詰めた女……それが花凜だ……。

2年前の自動車事故のせいで髪が白髪になってしまったが、それを気にすることなく、元のままボニー・テールにし、凜とした高潔さでデュエルに臨み、時代遅れともいわれる『ホルス』を使い続けるその姿から、言われる異名は『黒炎の姫君』……。

ちなみに今は夏休みで帰省中だから、太一と母親が住まうアパートに戻つてきていた。

とはいえる、有名人がいるということで…すぐに野次馬が集まるため、こんな朝早くにしか外に出られないのであった……。

「…僕もねえちゃんみたいになれるかな…?」

太一がポツリ…とつぶやいた。

「…まつ、努力すればなれるんじゃないの?今回の究極龍の召喚方法も、前よりは良かつたしね。
アルティメットティラノ

あつーそつだ…母さんが『アイス買つてきてい』つてお金渡してくれたから、コンビニよろつか?『マジで…やつた――――――』

太一がコンビニにまじってく……

「まつたぐ…中学生に見えんな…」

『せやな…』

ホルスが精靈の姿で花凜の傍らに降り立つた。

『あれじやあ小学生や……つ……主人……上……』
「はあ?……つて……――――――」

気づいたときにはもう遅かった……

建設中のビルから鉄骨が……花凜に向かって落ちてきたのだつた!――

そのあと、花凜がどうなつたか、――で書くにも値しないだらう……

……とつもない落下音を耳にした太一が、振り返り……花凜が付い

てきてないことに気が付いて、元来た道を走り……

地面に沈んでいる鉄骨の下に、みなれた白髪を見つけるのは、これからすぐの話……

オリ主人公について（前書き）

士郎「なんですか…」

星矢「なんでも3回目なのにまだ原作キャラが一人も出てねえンだよ！…」

凜「怒るな怒るな。次回からは登場させるらしいから。」

瞬「あ…でも士郎君の出番はあるけど、星矢の出番はないみたい！」

台本を確認中

星矢「…？まじで…！？」

瞬の台本をひつたくる星矢

星矢「ど…だ…俺のセリフ…！」

士郎「…落ち着けよ、星矢。

九条（作者）に頼み込めば、叶えてくれるかも知れないだろ？」

星矢「ほ…本当か…？」

士郎「（うわあ…泣いてるやこの子…）た…たぶんな…」

星矢「よし…！行くぜ…！ビ…だあ…！…九条う…！」

凜「…ちよ…あーあ…星矢の奴…完全に見えなくなっちゃった。」

「

瞬「とりあえず時間もつたないし、馬鹿はまつておいて、オリ主設定始めるよ。」

士郎「お前…星矢の友達じゃなかつたのか？」

オリ主人公について

・神代 花凜

年齢 20 (トリップ後) 18

性別 女

身長 165 cm (トリップ後) 161 cm

異名 『黒炎の姫君』

容姿 凛々しい美少女で元々は黒眼に黒髪。ボニー・テールだったのだが、18時の時の交通事故によるストレスで髪の毛が白くなってしまった。だが、神をいちいち切るのはめんどいのでボニー・テールのまま。

所属 デュエルアカデミア大学部本校2年生
穂群原学園 3年
(トリップ後)

服装 遊戯王GXに登場する『早乙女レイ』みたいな感じの服装が私服。だが、赤ではなく黒色のジャケットで、スカートではなく短パンつといったボーイッシュな感じ。

・体型がいいのでホルスには『もつたいない…女らしい格好した方がモテる』っと言われている

一人称 アタシ

デッキ 主に3種類のデッキを使っているのだが、トリップの際に持っていたのは2種類

- ・一軍…『ホルスの黒炎竜』と『カオスソルジャー 開闢の使者』が主力のデッキ

・現在の一軍（元々は二軍）バーン（デッキ破壊）系デッキ

・本当は『ネフティスの鳳凰神』『ユベル』を主体としたデッキもあつたのだが、トリップしてこなかつた。

趣味

デッキをいじくること 漫画を読むこと 剣道（4段だがトリップ後の年齢の関係で3段…ちなみに実力的にはタイガー以上セイバー未満）

特技 剣道 カードの精霊と会話する」と

詳細

鉄骨の下敷きになり死亡したはずなのに、目が覚めたら冬木市のアパートの一室にいた。

しかも、身体が高校生の頃の慎重に縮んでいた上、『穂群原学園』の3年に転入が決まっていた。

デュエリストとしての実力ないし異名は、この世界でも知られているが、違うところはアジア大会で『優勝』したせいで『剣術の家元』である神代の名を博打打の名で汚した』という理由で、家を出されたために冬木市に来た…ということになっている。

ちなみに、それまではデュエルアカデミアではなく普通の私立高校に通っていた……ということになっている。

料理の腕前は『イタリア料理』『ギリシャ料理』なら自信があるが、めんどくさいので滅多に作らない。

実は記憶を一部喪失しているが、花凜も周囲も気が付いていない。

1話 神父ってなんか怪しいイメージがある

- side 士郎 -

……4月……

すでに桜の見ごろは終わっていたが、それは桜だけの話だ。冬の間眠っていた草木が復活する時期であり……色とりどりの花々が咲き乱れる季節であり……そして出会いの季節だ。

「……まつたく…… アイツも本当に懲りないよな……」

俺は『道部の勧誘から逃げるように校舎を出た。

……俺の名前は衛宮士郎。

フツメン以上イケメン以下のルックスで、家庭料理が得意な草食系男子だ。

こういう少年の場合、一般的に運動オーナーということが多いのだが……自慢ではないが、弓を持たせたら文字通り100発100中という腕を持っているせいだ、『新入生が入部するついでにアンタも入りなさい！』っと、『道部を率いる美綴という少女の勧誘がいつも増して激しいのだ。

「俺が入部しなくても、みんなやつていけるのに……ん？」

はあ……とため息をつきながら坂道を下つていて、少し前の方に見覚えのある黒髪の少女がいた。

「おーい、遠坂……」

少女・遠坂 凜が驚いて振り返る。俺は小走りで坂を駆け下りた。

「……士郎にしては帰りが早いんじゃないの？」

「ん？……ああ、本当は今日も柳洞の生徒会の手伝いをしてよいつと思つたんだけどさ……ほら、アイツ、今日は休みだつただろ？」

「あら、そうだったかしら？」

「お前……同じクラスだろ？」

俺は呆れたように言つた……が、彼女はあんまり気にしてないみたいだった。

俺は遠坂と並んで歩きだす。

……「うひつてこる」と、一見すると高校生のアベックに見えるかもしない……が……

「本当に最近は円高でよかつたわ。海外モノの宝石が手軽に手に入るんだから！」

「どこの小母さんみたいだな。」

「なによ……この間の聖杯戦争の時に大量に宝石使つたりやつて、在庫がなくて困つてたんだから。」

あーーー、いいわよねえ……『強化』しか使えない魔術師は金の心配しなくていいんだから。」

「『投影』も使えるつて！」

「……そうよーー！それを使って贋作の高級品を作り出して売れば……」

「犯罪だぞそれ！！！」

……ピカウ、話している内容がアベックに見えない……

俺と遠坂は魔術師だ……が、2人の術の系統は違うものだ。

俺の使う術は『強化』……といって文字通りモノを強化させる術と、『投影』といって、イメージを元に、魔力で一時的に物体を作り出す魔術の2種類。

遠坂の方は、相手を指差すことで人を呪う北欧の魔術『ガンド』と、遠坂家に代々伝わる宝石を使う魔術を得意としているのだが……

先述の会話にも出てきた数か月前……この冬木市で行われた魔術師の戦い『聖杯戦争』で、彼女は大量の良質な宝石を使用してしまったらしい。

だから、宝石が足りなくて困っているみたいなのだ。

俺は困っている人を見捨てられない……が、宝石となると話は別だ。万が一『宝石を買ってやろうか？』何て言った日には……衛宮家の全財産が、横を歩いている『あかいあくま』に搾り取られること間違いないしなじだ。

だから、何も言わないに越したことはない。

「……もしかして、衛宮士郎君と遠坂凜りやん……だよね？」

いきなり誰かが話しかけてきた。

：一人の男がそこには立っていた。

神父の服を着てこなが、なんとなく遊んでいた雰囲気のある男だった。

「……遠坂の知り合いで？」

「違つわよ。えっと…オジサンは？」

「あ～…そういや、一人は俺のこと知らねーんだつけ……

俺は言峰教会の新しい神父って書いておこうか。」

「言峰教会ー？」

見事に遠坂とはもつてしまつた…。

……あまつこい思い出の無い教会だが……そういえば、新しい神父が来たつて聞いたことがあつたつける？

「まつー…立ち話もなんだし…ちよつと中元上がりなよ…『赤い悪魔』ちやん？」

「なつー？」

「誰が赤い悪魔ですかー……………」

あ～あ…遠坂の奴がキレた。

が、新しい神父は一貫でそれを見て楽しんでいる。……趣味悪いな……

「ほらほら～、怒つていると君の可愛い顔が台無しだっての。」

「お前って本当に神父ーー？」

神父は俺の質問には答えなかつた。……が、ニヤリと意地の悪そうな笑みを浮かべてこういったのだ。

「そう怖い顔しなさんなつて……小さな『贋作者^{フエイカ}』君よオ。」

「ーーお前、なんでそれをーー？」

……なんで会つて間もない神父が俺の能力……『投影』の事を知つているんだ！？

魔術師たる者、めつたに手の内は明かさないのに……

……目の前の男がなんだか薄気味悪くなつてきた……

「秘密秘密ーー！！

さあてと、中に入りなつて。お懐かしい人が待つてるぜ。」

「懐かしい人？」

チラリ……と遠坂の方を見た。遠坂も困惑しているみたいだつた。

……信用できない男の言葉に従つて……教会の中に入つてもいいのだろうつか？

もしかしたら、この教会の内部に入った途端……何かが始動する仕掛け

けになつていいたら……

「なんだ？『赤い悪魔』ちゃんは優等生じゃなかつたのか？そつちの坊やや、『使いの使い魔』がいないと、一人で教会に入ることもできないのか？」

「言つてくれるじやない！！！」

「入るわよ！！入ればいいんでしょ！！！」

キレた遠坂がズンズンと教会の中に入つていった。

「……ほら、お連れさんを追わなくていいのかい？」

「……それよりも、なんでお前はアーチャーの事を知つてんだよ？」

遠坂は頭に血が上つて気が付かなかつたかもしぬないが、この神父は先程…『弓使いの使い魔』つと言つていた。それで思い当たる人物は……一人しかいない。

「別に知つてたつて構わないだろ？」

「ここには言峰つていつたか？前神父が残した『聖杯戦争』に関する資料がたんまりと残つてんだからな。」

「まあ、それなら分かるかもしねない……
が、怪しい人物だ……用心しないと……

「さや――――――！」

遠坂の悲鳴が内部から聞こえてきた。

俺の体は考えるよりも先に動いていた。遠坂が入つていったヒンヤリとした教会の中に急いで駆け込む。

「遠坂あ――――どうしたんだ！？……つて……え？」

遠坂が悲鳴を上げた理由が分かつた気がした……

俺も、それを見たとき……頭の中が真白くなつたから……

「……シロウ？」

冷たい教会の床に倒れている8人の人物……その中の1人……青い瞳の剣士の中に、俺が映つたのが確かに見えた……。

「……」

目が覚めるとアタシは見知らぬベッドの上で寝ていた。

「おかしい……確かに自分は鉄骨の下敷きになつたはず……

ベッドの横にある小さな机の上に何か紙が置いてある……。
アタシはそれに手を通した。

「ん?」

「『あなた、神代花凜は死にました』が、特別措置により、高校三年生の体に戻つてトリップすることになりました!! BY K……」
「……」

〔冗談じゃない……ビックな人生を返せりやーーー!!〕

「つか、『K』ってだれだよーー? 神かーー? 神ならカツコつけて『K』なんて書くんじゃねえつてのーーー!」

「つか、アタシは、ビックの世界にトリップしたんだよーーー?
そんぐらい書ことけつてのーーー!」

アタシはこれから的生活を考え、深いため息をついたのだった……。

1話 神父ってなんか怪しいイメージがある（後書き）

星矢「……なんで俺たち『聖闘士星矢』関係のセリフがないんだよ……」

土郎「えつ……だつてさ、そりゃまあ……流れだから仕方ないんじゃ……」

星矢「納得いかね——！——！」

瞬「星矢、世の中納得いかないことだけなんだから……
ほら、僕と兄さんなんてその典型的な例だよ。」

まさか、僕と兄さんが同じ母親と父親から生まれた兄弟だなんて、
誰も信じないでしょ？ってか、フツーは納得いかないよ。」

凜「自分で認めているのね……」

2話 神父って毒物じりや不味いんじゃない?

side 遠坂

一体どうこうこと?

なんで……セイバー やアーチャー や……あの時に召喚されたサーヴァントが倒れているわけ?

つていうか……まあ……あの時に召喚されたわけじゃないけど、あの戦争に参加していた黄金の変態もいるわけ?

「遠坂あ――――――どうしたんだ!!?……って……え?」

先程の私の悲鳴を聞いたのだろう。土郎が教会の内部に駆け込んできて……目の前の状況を見て啞然としていた。

「…………シロウ?」

その声を聴いて、一人のサーヴァントがうつすらと目を開けた。

…………生きてる

「セイバー!?

「近づこひやだめよ、士郎……。」

倒れているセイバーに近づこうとする士郎を私は制した。
士郎は怒ったような感じで私をにらんだ。

「何すんだよ、遠坂……！」

「冷静になりなさい……。」それがあの神父の作り出した幻覚かもしけ
ないのよ……。」「

「……マスター……か？」

その声を聞いた私は、士郎と同じような気持ちになつた……が、そ
こはなんとか押さえこんだ。

「おやおや……よつやくお田代めつて事かな。」「

神父がニヤニヤ薄汚い笑いを浮かべて近づいてきた。

「あんた……何をやつたの？」「

いい？私はこんな幻覚に惑わされ……。」「

「幻覚じゃないっての。」「

「えつ？」「

その時の私はとても間抜け顔だったに違いない……。

「だから、そこにいるのは『元・英靈』。」

俺が受肉させて蘇生させたってわけ。つまり生きている第五次聖杯

戦争に参加した英雄さん達よ。」

「そ……蘇生つて……本當か！？」

驚いた感じでセイバーを見る士郎。

「……はい……確かに……受肉しています。」

「間違いないのね？」

「……！」の感じは間違いなく生きていた時の肉体だ。」

床に倒れ込んでいたアーチャーが起き上がりながら答えた。

「でもよ、俺たちを生き返らせて何するつもりだ？」

ランサーが神父をにらむ。

その通りだ。聖杯もない今……一体、この神父にとつて何がメリットなのだろうか？

「んーー……実はお前たち英雄さんの力を貸してもらいたい。」

「はあ？」

「……一緒に世界を壊しちゃせっ？」

そう言つて神父は私達とサーヴァントたちがいる方に手を伸ばした。

「断る……！」

誰よりも先に反応したのは、やつぱり士郎だった。

「世界を壊す？そんなことをしたらどうなるのか分かつてんのか！？」

「うんうん。分かつてる分かつてる……

でもさ……！」のままだと、英靈も魔術師も……ただクルクルと神の作り出した舞台の上で回っているだけだぜ？」

…ピクリ…っとアーチャーが動いたのが分かった。

…彼は『座』といつものを永遠の苦しみと感じていた……だから興味が出てきたのかもしれない……

「舞台の上をただクルクル回り続けるのと……世界を壊して秩序を立て直すのと……どっちがいい？」

「秩序を立て直すだと！？お前が神になるつもりか！？」

ふざけんな！…としげる感じで双剣『干将・莫耶』を『投影』し、神父に向かつて走る士郎…だったが…

「乱暴はいけないわよ。」

漆黒の露出面の多い鎧を纏つた女性が神父と士郎の間に割り込み……

「……？」

素手で士郎の剣を受け止めたのだ。

「パルティータちゃん！勝手に出てきちゃダメだろ？」

「『めんなさい。でも…』のままだと、『』の少年を殺す羽田になつてたでしょ？」

とつても笑顔が素敵な女性なのに……話している内容が……

つてか……あの二人、どういう関係なの！？

夫婦っぽいオーラ出してるけど、神父って妻帯禁止よね？

「っく……！」

後ろにはね飛んで、私達のいる位置まで戻ってきた士郎。

「大丈夫ですか、シロウー！」

セイバーが士郎に駆け寄つていった。…士郎は肩で息をしている…

「はあ……はあ……お前…人間か？」

「ふふふ…人間よ…今はね。」

「今は…つてことは…昔は違つたつて事?」

私が問いただすとパルティータは笑つて答えなかつた。

「…世界を壊すといつても、殺す人間は20人もいないわ。
それに…殺したところで一般人には迷惑がかからないし…」

パルティータが優しく言つた。

「…見た限りだと、貴方も相当な腕を持つているように思えますが
…
何故、私達の力を借りたいと思つたのですか?」

セイバーが見えない剣を構えながら問ひだした。

「それは…」

「ツマンねえだろ? 役者が少ないと。」

パルティータが言おうとしていた言葉を神父が遮つた。

「役者!?

「そう!俺もお前たち敵さんもみんな役者。
まあ…お前たちは断れねえぜ? 断つたら…お前たちも『敵』つと
みなして昼間つから襲つてやるぜ?」

緊張感がその場の全員を包み込んだ。

「冗談じゃない！！魔術師の戦いは人に見られたら…」

「那人を殺す…だろ？」

つま、結論は焦らなくてもいいさ。次の満月の日…一週間以内に決めてくれたらいいんだからな。」

バルティイータとは反対に、意地の悪い笑みを神父は浮かべていた……

side 花凜ー

「まったく…これじゃあ原作介入は難しいじゃん……」

アタシは近所のスーパーに向かいながら考え方をしていた。

部屋に置いてあった学生証には『穂群原学園3年』って書いてあつた……から、ここはおそらく Fate/stay night の世界……でも、3年生だから…原作メンバーとは別のクラス確定なんだよな……

まあ、『聖杯戦争』は冬だし……漫画やゲームを思い出しながら魔術の練習でもなんでもして、おくか……強化くらいなら見ようが見まねで出来るかもしけないし……

『でも、サーヴァントはまだいるんだよ?』

精靈化しているホルスが尋ねてきた。

……「…うちにトリップしてきたときに、アタシ自身のティックキまでト
リップしてきていた。」

これは特典か何かなのだろうか?

「…心よむなつて…」

そうね……言峰と契約でも交わして…バゼットから奪つたランサー
を貰う…とか?」

『悪質やな…主人…』

それより、受験はどうするんや?』

「一応…受験勉強の知識はあるからね…奨学金で行くか…それと
も推薦で合格しておいて、デュエルで稼いだ賞金で通つが…ん?」

駅前の新聞売り場で見覚えのある言葉を見つけて、アタシは思わず
立ち止まつた。

「ちよ…これって…」

『…えつ…でも…ここって冬木市で…Fateの世界やん…』

「…なんだけど…なにこれ?』

その新聞の一面向には…いつ記されてあつたのだ…

『グラード財団総帥・城戸沙織嬢 行方不明！？』

と

2話 神父って妻帯しちゃ不味いんじゃない? (後書き)

星矢「だから沙織さん…今までこのオマケコーナに登場してなかつたんだ…！」

瞬「いたら絶対に登場するキャラだもんね。
誰かに負けず劣らない目立ちたがりだし。」

星矢「それって誰のことだよ？」

士郎「そ…そ…うだーそれより、バルティーダって誰だ!？」

(話題を変えようとすると士郎)

星矢「ん~知らね。このキャラだろ?」

「ってかせ、テメーは本編に出てるんだからでなくていいだろ?」

士郎「…結局、そこに持っていくのか…」

セイバー「…それよりシロウ。早く帰りませんか?
お腹がすきました。」

星矢「！？それよりつてなんだよ……あのな……」

ランサー「んじゃあ、俺の分まで頼むぞ。
行く当てがなくて困つてんだ。」

凛「そういえば、確かにね……」

士郎「いこよ。」

ランサー「マジで！？あつがとなーーー！」

ギルガメッシュ「……なら余も……」

セイバー「あなたはダメです。」（キッパリ）

ギル「……ふつ……余のセイバーはツンデレだな。
気にしなくてもよいぞ。」

セイバー「……（怒）！－！」

瞬「ほーほー、押せえて、セイバーさん！－！」

セイバー「……っく……」

ギル「では、余はセイバーの作った料理を頼もう。
ありがたく思え。」

セイバー「…イライライライラ…」

アーチャー「…数分後にはギルガメッシュの三枚おろしが出来上がり
つているだろうな……」

ランサー「…同情はしねえよ。」

3話 卵つて割れたら後処理がめんどくさい

- side 紫龍 -

「……紫龍？氷河さんが来ているわよ？」

春麗が腕立て中の俺に声をかけてきたよつだ……なるほど……確かにこの小宇宙コスモは氷河のものだな。

「……分かった。」

腕立てを止めて立ち上がる。

「久しぶりだな、紫龍。」

「お前こそ元気そうだな、氷河。」

眼が見えない俺だが、小宇宙のお蔭で異母兄弟、氷河がそこに立つてこちらを見ていることが分かった。

「……それにしても、珍しいな……お前がここにやつて来るなんて。」

……「」は日本・冬木市……

グラード財団が援助をしている高校・穂群原学園に入学したため、紫龍と春麗は2人でアパートの一室に住んでいるのだ。……よく老師が泊まりに来て、今日も来る予定だが……まだ彼は姿を見せていない

い。

「実は……老師のことがなんだが……今日は来ることが出来ないよつなんだ。」

「ええ！？老師に何かあつたんですかー！？」

俺たちにお茶を出す春麗が驚いた声を上げた。

「大丈夫だ。彼はピンピンしている。」

「…………よかつた…………つきり老衰かと…………」

ほつと胸を下ろす春麗……一応、老師は現在……20歳の肉体を取り戻しているが……歳は200を超えてるので、いつ逝ってもおかしくない歳だ。心配しない方がおかしい。

「では……いつたい？」

「今日の夕刊を読んだか？」

「いや。……まだ来てない。」

「そうか……持ってきて正解だな。」

バサリ……と氷河が持ってきた新聞を広げた。

「嘘だろ……ー！？」「沙織ちゃんがー！？」

……そこには『グラード財団総帥・城戸沙織嬢失踪！？』と書かれ

てあつた。

「ああ……本当の話だ。

『『』には書いていないが……昨夜の警護についていた一角獣座の邪武と……あれはだれだつたか……あああれだ。子獅子座の蛮だ。あの2人が何者かに一瞬でやられ、お嬢様は連れて行かれた。

だから発覚してから教皇^{サガ}が中心となつて黄金聖闘士総出で調査に当たつてゐる。』

「……手掛かりはあるのか？」

「あるにはある……

邪武がいつにはお嬢様を連れ去つた人物は男だということ……その男が『後、必要なのは黒炎の姫ちゃんだけ』つと言つていたそうだ。

』

「黒炎の姫？」

……だれだそれは？まつたく心当たりがない。

「俺もよく知らないのだが……ヤコフが言つには、M&Wというカードゲームのアジア王者の異名だとか……」

……ちなみにヤコフ^フといつのはシベリアで氷河の従者として暮らしている少年のことだ。

「……それで、その姫とやらが、お前の学校に明日から転入してくるらしい。」

「…………つといつ」とは、その女を見張れ……といつとか?」

氷河が笑つたような気がした。懐から何やら封筒を取り出す氷河…

「主人公来たああ————！」

……なんか表通りから叫び声が聞こえたが……気にしないことにしよう。

氷河もチラリ…っと窓の方を見たが、すぐに俺に視線を戻した。

「さすが呑み込みが早いな。……」こういう任務は一輝よりお前の方が向いているだろ？…といふサガからの命だ。…これが勅命だ。
一応…万が一のため、この町に老師とは別に、黄金聖闘士が1人…
派遣されることになつてゐる。まだ誰になるかは未定だがな。」「紫龍……」

心配そうな顔をして春麗が俺の顔を見てくる……俺は春麗の頭に手を置いた。

「大丈夫だ。ただ見張るだけだからな。……その任務、受けよう。」

俺は封筒に手を伸ばした。

「……これって本当に沙織アーテナだよな……」

何度見たつて変わらない新聞の写真……どうこいつことだ? Fate / stay night の世界に来たんじやないのか! ? なのになんで…沙織嬢? 聖闘士星矢の世界観はいつてるわけ! ?

『つまり、Fateと星矢が混ざった世界なんとかやうか?』
「それしか考えられないよな……」

まったく…なんだよ一体…でも待てよ…フツーに考えて、フツーに生活してたら『聖闘士星矢』に介入することはないよな……

『なんや? 介入したくないんかい?』

「当たり前!! あんな死亡フラグわんさかの世界に入り込んだ暁には……

まだ Fateの方がフラグ少ないわ!! そもそも小宇宙使えないし!! つーか、小宇宙に比べたら魔術のほうが楽そうだし!!」

『……でも…主人は頑張れば小宇宙使えるかもしれんで?』
「無理だつて。

あれをするためには、腹筋何回やつてた? 100単位じゃなかつただろ?

それをぐくフツーの一般人にやれと?』
『いや…オイラと話してる時点ではいわへんで…』

そのホルスのツツコミは無視することにした。

「……つたく……なんでも。

セイバーは分かるけど、なんで遠坂やアーチャー……それにランサー
やライダーまで増えてるんだよ……」

「ん?なんか今……聞いた」とのあるよりつな声が……

「なあ、ホルス?今のつて……?」

ズガツ……ドカツ……!

「痛つ……」

「……わ……悪い……」

角を曲がった時に、誰かとぶつかってしまった。『テ』が痛い……

「う……うひひひひひ……つて……」

そこにいたのは……今のアタシと同じくらいの年齢の、赤髪の少年……

「主人公来たああ————!」

「!?

思わず叫んでしまった。向こうは驚いてるナビや……でも、いつち

だって驚いたんだから。

これ……ってどうからどう見ても衛門十郎じゃん……あの女つたらしじゃん……

……あつ……でも、たらじつてこうなが、上条当麻とか一夏の方がたらじしか……？

……ともあれ、初めての原作キャラとの遭遇か……

「「」……めんなさい。取り乱しちゃつて……」

「……いえ。大丈夫……つて……ああ……卵が……」

見ると、スーパーのレジ袋から黄色い汁が……つてか、パンパンなレジ袋をなんで5つも持つてるの？

「……えつと……」家族が多い……んですか？」

一応、初対面なので慣れぬ敬語を使ってみた。
すると土郎は曖昧な笑みを浮かべた。

「家族つて言つたか……大食漢の居候が沢山いて……あはハハハつて笑うしかないですよ。」

「うん……遠い田をしてるよ……ん？待てよ……」この時期に何でそんな居候が？

……考えるのは後だ。とりあえずは……

「卵…差し上げますよ？」

アタシのレジ袋に入っていた卵のパックを士郎のレジ袋に入れた。

「そ…そんな…悪いですよ！」

「はあ？ だってアタシがぶつかって割れたんだから…弁償しないと
気が済まないつてもんよ。」

それに…マジで食費が大変そうだしな。

「ん？」この後どうなったかって？

フツーにお礼言われて別れたよ？ だって… 赤の他人だしね。

3話 卵つて割れたら後処理がめんどくさい（後書き）

カミコ「おっ……今回は我が弟子が登場したなー。」

カミコ「……なにやつなんだ?..」

カミコ「決まっておひつー!氷河の勇士をヒロからロバーロビダビン
グしているのだ!—」

セイバー「……ですが、氷河は勇士と言えるほどの活躍をしてなか
つたように思われますが……?」

カミコ「いや!—氷河は何をしていても勇士と言えるのだ!—
……マークに関してはクールでいられないが、他の面では師をも超
えているのだ!—」

氷河「わが師!—何をおっしゃっているのです!—
私はまだ…わが師に学ぶ」ことが山ほどあります!—」

カミコ「…立派になつたな氷河。」

氷河「いえ。まだ足元にも及びません。」

凛「……なんつーか…暑苦しいわね…」

ライダー「…かれこれ20分はああしているわね…」

アーチャー「病的だな。」

ミロ「すまん……ああこいつ奴なんだ。」

士郎「…そついえば星矢は？」

アーチャー「ああ…彼なら向こうの隅で負のオーラを放つていろ。」

「

星矢「…なんで俺の出番がないんだ……なんで紫龍と氷河が?…春麗より後に出る主人公ってなんだよ…ブツブツ…」

十郎「……やつらじつあおこへやせぬか……」

4話 突撃！隣の晩御飯！？

- side 花凜 -

「…………つたく……転入生一人に騒ぎすぎだ……」

はあ……つとため息つきたくなるよ。

「彼氏いるの？」とか「好きな人はどんなタイプ？」とか「じゃあ、カードで例えるとどんなタイプが好み？」…………とかどうでもいいこと聞いてきやがって……

にしても……まさか衛宮士郎や遠坂凜と同じクラスだったとは……

もつう年生になつてゐつてことは、聖杯戦争は終了してゐつてこと……

でも、サーヴァントがいるみたいだし……あれか？同じ4日間が繰り返される……つて話？

…………でも、アレだと、凜はロンドンに行つてゐんだよな？

「……サッパリわかんねえ……ん？どうした、カオスソルジャー？」

カオスソルジャー開闢の使者が、いつの間にか隣に立っていた。

『……主人……気が付いていたか？つけられてたぞ。』

「……マジで？」

『今は『混沌の黒魔術師』が『人避け』の術を使っている……だから屋上は安全だ。』

そういうと、微かにカオスソルジャーは微笑んだ。アタシも微笑み返す。

「サンキュー……で、誰だよ？」

アタシだつてフツーなら、つけてる奴がいたら『氣づくのに……』

『まだわからん……』

『へつ……情けないんやな……まだわからへんの！？』

ホルスが嘲るように声を上げた。

「なら、アンタには分かるの？」

『今から調査や……見ておれ……開闢の使者……』

俺の方が主人のデッキで一番の相方になるカードや……』

「……無理すんなよ……」

猛スピードで消えていったホルス……まつたく……本当にカオスソルジャーと絡むと暑くなりやすいな……

『……まつ……とりあえず……もうすぐ授業だから……戻るか。』

『気をつけるよ……主人』

分かつてる……って言う感じで手を振りながら、屋上を去るアタシ

……こじりも……つけられたるか…嫌な感じだな。

だから…今日は早く帰らつて思つてたのに……

「神代さんはご飯普通盛り?」

「なにかアレルギーとかありますか?」

「…………なんでこいつなる?」

思わずそりつぶやいてしまつた……

何で早く帰らうとしたのに、士郎の家で夕飯を食つことになつたんだ?

…………しかも、士郎自身に許可ははとつてあるのか…?

明らかにこの家にいまいるのは、タイガー…! とアタシの担任でもあり士郎の姉的存在の藤村先生と、士郎の『道部の後輩である間桐桜…とそのサーヴァント…ライダー。

それからアインツベルン城に住む少女イリヤ…と、家の外の庭でおとなしくしているのは彼女のサーヴァント…バーサーカーだ。

……えつと……あそこで桜と料理してんのは凛か……ん? よく見たら

凛のサーヴァントのアーチャーまで手伝ってんじゃん！？

どうなつてんだ……？

「ただいま。」「あ～～疲れたぜ。」「おなかが減りました」

ん？……たぶん士郎が帰ってきたんだな……ってか、『氣のせいかな？』セイバーは分かるよ？士郎のサーヴァントだもんな。でもや……なんでランサーの声まで聞こえたんだ？

……一體、どんな設定だよ……？

……で、アタシを見た士郎の第一声が……

「……なんだせ？」

……うそ。分かるよ、その気持ち。

s.i.d.e 士郎 -

「……なんですか？」

俺は、いつもの口癖をつぶやいてしまった。

…今日は、学校から帰るとすぐに、セイバーとランサーと一緒に、主に食材の買い物に出かけた。

実は今、衛富家は食糧難を迎えるとしていた…。

まず、夕飯を食べに来るのは、いつも藤ねえと桜…と桜についているライダー。

あと…たまにイリヤも食べに来ている。

ちなみに、ついこの間までは藤ねえのところにいたイリヤだが、今はバーサーカーも戻ってきたので、元の城に戻り生活をしている。

で、そのほかに、『今後の作戦を立て易くするために』とかで凛と彼女のサーヴァント…アーチャーが居候している。

…あと、『行く当てがない』ランサーを引き取るはめになってしまっていた。

ん? ギルガメッシュはって? うん…彼を俺の家に入れるのを断固反対した奴がいて…

彼は今、結局…うちのセイバーが戦闘不能にした後、海に重りをつけて沈めていた。

…どうなったかは考えないでおり…

で、俺のサーヴァントのセイバー…つまり4人も居候がいるのだ。

…おかげで家計は火の車になりそうだ……

この上、キャスターとアサシンまで来なくてよかつたよ…キャスターは葛木先生の奥さんつて位置に収まっているし、アサシンは門番として柳洞寺にいるからな。

「…あ…あ…なんで俺が買い物の手伝いなんだよ。」

ブツブツ言つランサー…だが…

「おい坊主、こっちの方が得なんじゃねエか?」「こっちの方が新鮮だぞ」

みたいに手伝ってくれるから…

「シロウー」これを食べてみたいですね…」「これは一体どんな味がするのですか?」

つと言つて、買い物の量を増やすセイバーよりずつといい…。

で…帰宅したら…

「なんですか…?」

…なんで見慣れない人が混ざつてるんだ?長い白髪が特徴的で…穂群原学園の制服を着た少女…

「…つて…ああ…た…確か…転入生の神代…?」

「…あ…すまん…邪魔しているぞ…たしか…衛宮だっけ?」

「よく覚えてたな……ってか、昨日は卵、ありがとな。
まさか、あの時は転入生だとは思わなかつたよ。」

そう……昨日、ここから卵を惠んでもらつたんだよな。
……つて……それよりも……

「なんで神代がここに？」

「……この人に拉致られた。」

「ひどいじやない、神代さん……」

藤ねえが怒つた感じで言つた。

「土郎、あのね……神代さんは一人暮らしだから、これから時々、一緒に食べることになつたから。」

「…………すまん……アタシも悪いとは思つたんだがな。

つてか、衛宮にすべてかかつてるんだ。アタシ的にはもう帰りたい……こんなハーレム的空間から。」

「……いや……どこがハーレム？」

「とほけるな。織斑一夏ほどではないけど、これはハーレムだろ？」

男の率と女の率の割合がおかしいだろ！――！」

「織斑一夏？誰だよそれ……？」

「そこは気にするな。」

俺は少し考えた……このままいくとマジで経済面が危ない衛宮家……
でも……

「一人暮らしなら……仕方ないか……」

「ほら、神代さん！士郎もいって言つてるんだから、もう少しリラックスしなさいー！」

つと言つてポンポンつと神代の背中を叩く藤ねえ……

「はいはーい！出来たわよーーー！」

遠坂がデントと料理を持ってきた。

「ゲツ 中華かよ」

少し嫌そうな顔をするランサー…… そういえば、言峰の所では毎日
が麻婆豆腐で、中華には飽きたって言つてたっけ……

「文句があるなら、お前の分を全てセイバーに回すが

「つてめー！何言つてやがるんだアーチャー！」

つて！つてなに俺の分を勝手に食べてんだ――――――――――

セイバーが黙々とランサーの分まで食べていた。…なんか哀れだな
セイバーはキヨトンとした顔をしてランサーを見た。

「……」

「よくねえ———. . .」

「…なら、アタシの分を半分食べるか？」

…見るに見かねたのであらう神代が、自分の分の半分を取り皿にとつて、ランサーに渡した。

「嬢ちゃん…お前…いい奴だな！…」

「つてかさ、衛宮…この兄ちゃんやお姉さんたちってどんな関係なわけ？」

出来れば、さつきから庭からじつち睨んでる…あの『トカブツ』の正体も教えて欲しいんだけど…」

「あれはバーサーカだよ…！…イリヤのサーヴァント…！」

俺が答える前に、イリヤが口を開いた。

「サーヴァント？」

「えつと…つまり…イリヤの召使つことだ…！」

魔術師ではない神代に『サーヴァント』なんて説明しても理解してくれないはずだ。

「えつと…この人たちは、俺の義父の知り合いで、居候中なんだ。あとは…凜の知り合いに桜の知り合いつてことかな？」

右からセイバー・アーチャー・ライダー・ランサーだ。」

「…偽名かよ？」

……まあ、名前っぽくないからな……

「いや、これでも、この人たちの本名なんだよ…。」

だつてや、言えるわけないだろ！！

アーサー王だの、クー・フーリンだの……本名いつでも絶対に信じてくれないよ！！

「……ふうん……面白いね。

セイバーだから、その人の手には剣ダコがあるんだ。ん？でもさ、なんでアーチャーって人にも剣ダコがあるわけ？弓使いなら、剣なんていらないだろ？」

「……ほう……よく気が付いたな。」

アーチャーが少し驚いたような顔をしている。

一瞬で自分がよく使う武器を見抜かれてしまつっていたのだから、無理もないかもな。

「そういや、嬢ちゃんにも剣ダコあるじやねえか！」

神代の手を見たランサーが言つた。

「……まあ……少しあつてたことがあつて……」

「へえ――！――面白くじやない――！」

じゃあ、後で私と勝負しない？

藤ねえが身を乗り出した……が

「待つてください、藤村先生！！」

遠坂がストップをかけた。

「その勝負、先生相手だと神代さんも本気を出しこへこと思つので
…どうですか？」

「この後、セイバーと神代さんが戦つたら？」

「ちょ…遠坂！？何を…」

「…負けた方が一週間皿洗いのせびつい。」

罰ゲーム付きかよ…って…ん？」

そういえば…これから一週間は遠坂が、皿洗いの当番だったんじや

…

…そうか…ここ…これを出汁にして、神代に皿洗いを押し付け
るつもりだな。

「ですが…私に勝てるわけが…」

「んじゃあ、やつてみるか。」

あつむり引き受けた神代。

「何事もやつてみないと分からぬしな。」

…「うわあ…田が本気だよ！」…まあ、セイバーは見た目からし

て弱そだからな。

「仕方ありませんね……」

ため息をつくセイバーだった。

……何はともあれ、一週間の皿洗いは神代に決定したな……つと俺は
思った。

5話 竹刀つて意外と高いのすぐ折れる

s i d e 花凜 -

目の前にセイバー（アーサー王）が現れた。

戦つて死ぬ

降参して恥をかく

……じつちも嫌だ!!!!

つてかさ、なんかノリで試合申し込んだけど、これムリだろ
!!

藤ねえみたいに反則技使つたつて勝ち目ないつての…!

だつて…目の前で竹刀を構えている可憐な少女…は何を隠そうアーサー王だよ！？英雄中の英雄だよ…！

……無理だ…勝てそうにない…でも…負けたくないって思うんだよな…

アタシは深呼吸をして竹刀を構えなおした。

「…遠坂…お前…意地悪いぞ」

「でも、承諾したのは、あの子よ。」

「これで私が一週間皿洗いしなくて済むわ……」

「……嬢ちゃんは意地が悪いなあ。」

「やう思つたらンサー？マスターの意地が悪いのはともかく、相手の力量を見極められない小娘のせいともいえると思つぞ。」

「外野……うるさいなあ……ってかせ、あの「赤い魔魔」め……そんな魂胆があつたとはな……」

皿洗いは嫌だ。めんべくせ……つとなつたら……

「勝ちに行くしかないってか……」

「……言つておきますけど、貴方では私に勝てません。」

んなこと百も承知だつての……！」

「やうひか……でもさ……そつならぬかもしれないぜ……！」

床を蹴り一気にセイバーとの距離を縮めた。

……面みたに派手な勝ち方は狙わないで……胴か小手を狙えば……

スカツ

「えつ？」

……まさか……避けられた？自信あつたんですけど……

「……まあ……まだまだ……」

スカッスカッスカッ

……イライラするくらい避けられる……何？今のアタシって藤ねえ状態？

「勝負あつたわね……」

ライダーらしき女性のつぶやく声が聞こえた気がした。
アタシにだってわかるさ……これだけ避けられてるつーことは、見
切られてるつーことくらい……
でもさ……

「なんか負けたくねえってんだよ……」

誰かにつけられている……って気が付いたから即席で作ったチョーク
煙幕を2つ床に投げた。

とたんに、白い煙があたりを覆い隠した。

「ゲホッゲホッ！…これは…煙幕！？」
「違う…これはチョークよ！…」
「……藤ねえと同じ発想だ……」

外野の声なんて気にするか！！！

確かに藤ねえと同じ戦法だが……アタシはあんな派手にいかないさ。

身をかがめて足元を……狙つ……

「はああっ！……！」

スパンツ！……！

あれ？ また手ごたえがない！？

「惜しいですね。ですが……あなたの負けですよ。」

上空から声が聞こえた。見ると……セイバーは弧を描くよつて飛
んでいた。

……たぶん……攻撃が来る直前にジャンプしたのだわ。

「甘いよ……！」

空中には足場がないから態勢の立て直しは不可能！
アタシは落下地点目がけて走った……が……

スパーン！！

あれ? なんでアタシが宙を舞つてるんだ...?

「くはあつーーー」

ドサッ! と床にたたきつけらる...が、痛みはそこまでなかつた。

おそらく、アタシが振り上げた竹刀とセイバーの竹刀が当たつて
力負けしたアタシが飛ばされたのだろ!つ。

「つぐ... まだまだ...」

少しふらついたがアタシは立ち上がり、竹刀の先を無表情なセイ
バーに向けた。

すると、微かにセイバーの顔つきが変わつた。

「...まだまだ? あなたはもう分かつているはずですよ。

私には勝てないと。」

「で... でもあ.....」

「うぬうぬ... つと涙田になつてしまふアタシ.....

さすがに、やつすぎた...と思つたのか、セイバーが戸惑いながら近
づいてくる.....

そしてセイバーの手がアタシに触れる刹那! ! !

「…？」

「泣くもんか…アタシが…！」

セイバーの竹刀を奪い手の届かない位置まで放り投げると、右手で自分の竹刀を振り上げ…そして…

パシイ

……やつぱつ……真剣白刃取りされました。

「…」今まで多少の反則は田をつぶつてきましたが…
さすがに今のはイラッときました。」

う…うわ……ものすごいパア～～といつ効果音が付きそつた笑顔

……
やばい……不味いかも…

「貴方には騎士道といつもの骨の髄までしみこませてあげましょ
う。」

怖い…

正直にそう思った…彼女からは”殺氣”がじみ出でていた。

一歩後ろに下がろうと思つたけど、後ろは壁……少しずつ近づいてくるセイバーが怖い。

「のままだと……殺される……」

アタシは……

「負けたくない！――！」

振り下ろされたセイバーの竹刀がやけに遅く見えた。
アタシは何も考えず、ただ「勝ちたい」一心で自分の竹刀で攻めに行つた。

バシイイイン！！！！

「……？」

何が起こったのか自分でもよく分からなかつた。

ただ…セイバーの表情が一瞬、ポカンとしたかと思うと、即座にアタシから離れるように後方へ跳ね飛んだ。

なんか…表情が別の意味で怖い…あと、周囲の視線が痛い…

「貴様…今の力はなんですか？」

「へつ？今の力って…！…！」

その時、アタシは気が付いた。…セイバーの持っている竹刀の半分より上がボツキリ折れてなくなつていてることに…

それから…自分の内側から感じる燃え上がる種火のような何かに

…

「あ…あはははは…って笑うしかないや…」

力が抜けて座り込んでしまつた…。

分かるぞ…なんとなくだけど、なにをしたか…何に目覚めたか…
こりや…死亡フラグが立つたかもな…あははって笑うしかないよ

!!

「いいから答えるーーー！」

怖い顔したセイバーが問い合わせてくる。

アタシは自身の額に手を置いて下を向いた。

「……たぶん……」いやあ第六感……小宇宙コスモに目覚めたんだな……
あはははは……死にたくないのに……」

……本当は魔術の方に目覚めたかったのに、なんで小宇宙コスモに目覚め
たんだよ……！」

聖闘士にはなりたくない……魔術師の方が憧れるのに……

アタシはもつ、笑う」としかできなかつた……。

5話 竹刀つて意外と高いのにすぐ折れる（後書き）

星矢「なんでさーーー！」

士郎「え…？それって俺の口癖なんだけど…………」

星矢「なんでまたF a t eネタなんだよーーー！」

桜「ほんの少し聖闘士星矢の小宇宙といつ単語が出てきましたけど
…………」

星矢「納得いかねーーーー！」

紫龍「諦める、星矢。

今の舞台は冬木市だ。必然的に聖闘士星矢のキャラが少なくなるのが分からぬいか？

……それに、次回からは聖闘士ネタも増えると思つぞ？

星矢「そ…そうかなーー？」

凜（単純ね……）

瞬（……星矢は出番されるか分からぬのに……）
『この話の中心となる聖闘士は題名通り黄金聖闘士なんだから……』

沙織「では、もう少し星矢の出番を増やすよ! または題名を『G
OLD』から『BRONZE』に変更するよ! 直談判してきまーすわ。」

「

——『青銅』同『沙織さん……?』

士郎「えつ? ……『GOLD』では行方不明つて……」

沙織「だつて……暇なんですもの……出番なくて。」

瞬「……沙織ちゃんしこや……」

6話 勘違いから大惨事になる」といつてよくある

s i d e 士郎 -

「つて」と、アタシはもう帰るよ。」

遠い目をして『コスモ』について語ってくれた神代はそういうと、ようりよると立ち上がった。

神代が言つには『コスモ』というものは以前テレビでやつていた『ギャラクシアン・ウォーズ銀河戦争』で星矢たちが使つていた技の源…だそうだ。で、それがなんか目覚めてしまつたと……

なんか神代つて凄い奴かもしれない……

「えつ…もう帰っちゃうの!?

貴女とはM&Wについて話し合いたかったのに……」

イリヤが抗議の声を上げる。

……そういえばこいつ…M&W大好きだつだけ?
神代はイリヤの頭をポンポンつと叩いた。

「『じめんな、なんか疲れたからさあ…。
それに、なんか嫌な予感するし……また今度な。』

「いやな予感?」

俺が疑問符を浮かべると、神代は困ったような顔をした。

「えっと……その……あれだ。
アタシの髪つて夜道じゅう目立つだろ？だから何かと絡んでくる奴が多いんだ。
もつとも、そいつら全員ブツ倒してきたけど……なんか今日は嫌な予感がすんだよ……。」

確かに神代の髪は白い……夜道じゅう目立つだろ？……
つてこれは同じ白髪を持つイリヤやアーチャーにも言えると思うが、
イリヤにはバーサーカーという最凶のサーヴァントが付いているし、
アーチャーは男だ。アーチャーを襲う人間なんて想像もつかない。

だが、神代は弱そうに見えるし一人だ。……さつきの「コスモつてい
う力が使えるから怖いものなしにも見えるが……見るからに疲労
感が出てるので、使いこなせるかどうかも危ついだろ？……

「んじゃあ、俺が家まで送つていいくよ。」「なつ！？士郎！？」

遠坂が驚いて声を上げた。

「だつてさ……疲れてるみたいだし……」

「まあ……確かに最近は物騒だし……ね。

藤村先生を襲う人がいるとは考えにくいし、イリヤにはバー・サー・カ
ー・桜にはライダーが付いてるけど、神代さんは1人だからね……

「ちょ……アタシは1人で帰れ……」

「士郎や遠坂さんの言つ通りよ！――！」

藤ねえが神代の肩をつかんだ。

「だつて神代さんは疲れている上に、この町のことをよく知らない
でしょ！？」

いいから士郎に送つてもらいなさい。」

「……分かりました。」

ため息をはく神代……

「……じゃあ、途中まで頼むよ、衛宮。」

……なんか……そんなんに一人で帰りたいのかな？つてくらい嫌そ
うな感じの顔を向けられた。

てきた。

……あの少女は何か変わっている……

あの家の中で、習得には何年も厳しいとしか言い表せない修行を積まないといけないコスモ小宇宙に目覚めたのも変わっていると思つが……

それよりも、彼女からは、まだ小さいながらもう種類の小宇宙を感じるので。

1つは荒々しい小宇宙……もう1つはそれとは対極の、すべてを包み込むような小宇宙……

2種類の小宇宙を持つなんて……サガみたいに一重人格なら分かるが、それでもないみたいだ。

一体彼女は……何者なんだ？

「…？」

公園の辺りに差し掛かった時、突然、殺氣を感じた……と思つたら、何か刃物のようなものが俺に襲い掛かってきた。

俺がそれを避けると、攻撃してきた相手は感心したような声を上げた。

「ほう……なかなかやるな……」

「お前はだれだ！？」

「お前がストーカーをしてる少女の守護者……とでも言つておいで。」

青い騎士はそうこうと、剣を俺に向けてきた。

……なんでこんな時代錯誤の騎士が街中に！？……つと突っ込みたくなつたが、ツッコむ前に乱入者が現れた。

「コラアアア！！！オイラが花凜の守護者や……！
お前は黙つてればいいんやんけ！！！開闢！！！」

物凄い勢いで白銀の巨鳥が割り込んできた。

……物凄い怒りのオーラを感じる……

「ふつ……ホルスよ……頭が悪いのではないか？」

お前は守護者ではなく守護鳥なのではないか？」

「ええんやんけ！！守護者でも守護鳥でも主人を護る一番の相方は

オイラや……！」

『ブラックメガフレイム』…………

そういうと鳥は俺に向かつて黒炎を放ってきた。

「廬山百龍霸…………」

黒い炎を、俺の放った無数の龍をかたどつた闘氣で相殺させた。

ズトオオン！！！

物凄い爆音があたりに響き渡る。軽く青い騎士が舌打ちをしていた。

「……不味いぞ……このままだと人が集まつてくる……
やりすぎだ……ホルス。」

「うるさいんや！！！このストーカーには嫌というほど……
ん？ つてか、なんでストーカーがオイラの炎を消すくらいの拳を持
つてるや？」

ホルスの眼が、怒りに染まつた眼から、獲物を狩るときのような目
に変わつた。

「……分かつたで……

お前……主人を狙つてるんやろ？」

……どうやら完全に誤解されているらしい……

「待て……俺は……」

「問答無用！！『ブラックメガフレイム』……！」

ホルスが黒炎を再度放つた。

……仕方ない……倒すしか方法がなさそうだ。俺は小宇宙を高めた。

ズトオオン！――！

「よつしゃあ――！」

「……果たしてやつらうまくいくかな？」

「――？」

俺を灰にしたと思い込んでいたホルスはあっけにとられていた。

「廬山昇竜霸！――！」

廬山の大滝をも逆流させる拳をホルスに向けて放った。

「グフアアア――！」

ホルスの口から鮮血がしたたり落ちたのを見た。

そして……力尽きたのか、バタリ……とホルスは、そのまま地に崩れ落ちてしまった。

それを少し離れたところから見ている青い騎士……。騎士は一度しまつた剣を再び抜く。

「……我が同朋をここまでするとはな……たかが人間が。
後悔するがよい！――！」

静かな闘氣と殺氣をにじませている……これは見境もなしに突っ込
んできたホルスより厄介な相手になりそうだ……

「……仕方ない……來い！龍星座の聖衣！――！」

「何を呼ぼうにも……俺の剣からは逃れられんぞ！――！」

青い騎士が剣を振り下ろした刹那！――！

カキーン――！

「……久々に使つことになつたな……」のドラゴンの盾を……

間一髪間にあつたようだ。

自分でもほとんど意識しない間に、濃緑色の聖衣……龍星座の聖衣が
俺を纏い、聖衣の中でも

最高の硬度を誇る盾が、青い騎士の剣を防いでいた……が、毎度の
ことながら、すでに傷がついていた。

「……俺の剣を防ぐとは……な。」

青い騎士は少し汗をかいていた。

「……つぐ（実体化している時間が長すぎたのか…思った以上に疲労が激しい…！）

「時間がない…………これでケリをつけろーーー！」

剣に全身全靈の力を込めている青い騎士……なら、こちらも戦士として、それに答えなくてはな…
俺も最大限の小宇宙を高めていった。

「いくぞ！！俺の奥義！『时空突破・開闢双破斬』…………！」

「受けてみろ！全てのモノを切り裂く聖劍…『エクスカリバ』！」

青い騎士の剣から放たれた斬撃と、俺の左手から放たれた斬撃とがぶつかり合つた！！

ドシャアアン！！！

斬撃同士のぶつかり合いで勝つたのは俺の政権だつたらしい。

青い騎士は聖剣の斬撃に耐えられず、剣が折れ…自身は大木にたたきつけられた。

「くはあ……」

「……か……開闢……？」

口から赤い色の液体を出した騎士は、動かなくなつた。

ホルスの口から弱弱しいが、仲間を心配するような声が漏れた。
……が、騎士が反応しないのを見ると、ホルスの目に再度、光が灯つた。

「……まだやるのか？」

ホルスは満身創痍だったが、それでもなんとか起き上がり、俺を睨みつけてきた。

「……はあ……はあ……もう……オイラしかいないんや……

主人は……花凜の所には行かせてたまるかつちゅうんや……！」

「……だが……お前の主人を見張ることが俺の任務なのでな。

悪いがいかせてもらう。お前では俺の相手にはならん………？」

その時だつた。上空から斧が振り下ろされるのに寸前まで気が付かなかつた。

ズシャアアアアン！――！

さつきまで俺がいたところの地面が変形していた。

「…本当にカードの精霊ついていたんだね…」

少女の軽やかな声が俺の耳に入ってきた。

見てみると、斧…ではない…！岩でできた剣を軽々と持ち上げている、2mを超える巨大な上半身裸の黒っぽい男と…その足元には、この場には不似合いな…まるで雪の精霊を思わすような白い髪の少女が佇んでいた。

「城に帰ろうとしたら、大きな物音がするんだもん。びっくりしちゃった……けど…」

「まさか花凜ちゃんの精霊が襲われているなんてね…」

「…お前…神代花凜の知り合いか？」

「知り合いつて言つたら…まあ知り合いかな？」

それよりもさあ…「こまでもM & Wの精霊に危害を加えるなんて許せないな。」

微かに怒りがその言葉の中に含まれていた。

「あの鎧の人をやっちゃつて！バーサーカ！――！」

「ぐおおおん！..！」

バーサーカーと呼ばれた巨漢が俺に襲い掛かってきた！..！.

6話 勘違いから大惨事になる「ソレハシヨベア」（後書き）

「イリヤと紫龍が対峙してた頃、

・衛宮邸

セイバー「……なにやら外が騒がしいですが…大丈夫でしょうか、シロウは…」

凛「平気よ、平気。
どうせ酔っ払いが不良とドンパチやつてるだけよ。」

アーチャー「…それにしても騒がしそぎだと思つんだがな。」

桜「神代さんには先輩が付いていますけど…
さつき帰つていったイリヤちゃんは大丈夫でしょうか？イリヤちゃんの家がある方向ですよね？」

ライダー「問題ないわ、サクラ。」

ランサー「やつやつーあの子にはバーサーカーが付いているんだぜ

？」

凜「そうね……あのバーサーカーが付いているんだから……つて……」

一瞬、静まり返る室内……

ランサー「……なあ……あの物音が聞こえ始めたのって……その……バーサーカー達が帰つてから……だよな?」

アーチャー「……だな。」

セイバー「リン!私は今からシロウの元へ行こうと思っています!――!」

凜「ま……待ちなさいよ、セイバー!――!」

セイバー「何故止めるのです!?!」(つしている間にもシロウが暴れる)ことしか能のない獣の餌食に!――!」

凜「何も土郎とバーサーカーが敵対してないでしょ!」

土郎がバーサーカーと組んで敵と戦わざる負えない状況になつたとか

…………やっぱり私も行く！――

アーチャー「落ち着けマスター。衛宮士郎なら無事だと……」

凛「アンタよく落ち着いていられるわね――！
いくわよ、セイバー――！」

セイバー「出陣ですね、リンク――！」

ランサー「……仕方ねえな……危なつかしいから着いていってやるか。

――

凛「アーチャー！？何グズグズしてるの！？行くわよ――！」

アーチャー「……了解だ、マスター。」

桜「……私たちは御留守番……か……（先輩も……みんなも大丈夫かな？）」

ライダー「……落ち着きのない人たちですね……」

7話 時差つて計算するのめんどくさい

side デスマスク -

つたくサガの奴……こんな夜中に呼び出しあがつて……
これも、あの女神の嬢ちゃんが誘拐されたからだぜ……

俺はあぐびをしながら教皇の間に辿りついた。
玉座に腰を掛けているサガが自然と目に入る……

「蟹座^{キャンサー}の黄金聖闘士、デスマスク……ただ今参上いたしました。」

「来たか、デスマスク。」

「……つてかさ、こんな夜中に何なんだよ？」

俺はテメエの命令でずっと黄泉比良坂を監視してたんだぜ？』

冥界への入り口……『黄泉比良坂』に自由に行けることができる俺……
と五老峰の老師と前教皇と交代で、冥界へ向かつて歩く亡者の中
に女神の嬢ちゃんが混じつていなか監視を続けていたのだった。

「……すまんがお前とアフロディーテに頼みたいことがあってな……」
「アフロに？」

アフロディーテといつのは俺の悪友で、魚座の黄金聖闘士の『男』

だ。

「でもよ……アイツの小宇宙を感じねえんだけど？」

「奴には先に現地入りさせたからな。」

……実はお前とアフロディー^テに『黒炎の姫君』……つまり『神代花凜』という少女の保護を頼みたい。」

「誰だソレ？」

「うむ……実はアテナを連れ去った人物が『次の標的』と定めた人物だそうだ。」

「……名前的に日本人だろ？なら青銅のガキどもに任せればいいじゃねエか？」

「……と思い紫龍に監視・警護を任せたところ……

奴は瀕死の重傷を負つた。」

「マジかよ！？！」

おいおいおい……あの紫龍が負けたって！？

あんまりいたくねえが、奴は俺たち並：か以上の力を持つてるんだぜ！？

「先程まで氣を失つていたが……目を覚ましたので話を少し聞くことが出来た。」

少女を監視していたところ、突然……青い騎士と白銀の鳥が襲い掛かつて来たらしい。

で……こいつらは簡単に倒せたそつだが……その後から来た巨漢にやられたそうだ。」

「……どんな奴だ？」

「……2mを余裕で越える男で、一度拳で頭をとばしたが、再生したそうだ。」

「……なるほどな……だから俺か……」

なんでサガが俺を呼んだか分かった気がした。

物理攻撃が効かない相手なら……魂に攻撃をすればいい。

黄金聖闘士の中で魂に攻撃できるのは……俺と……N女座のシャカと双子座の力ノンくらいだ。

力ノンの奴は海界の管理で忙しいし、シャカは言つことを聞くかいマイチ分からないので、俺が出動つことになつたんだろう。

「……で、なんであとアフロも？」

「うむ……紫龍が言つには意識を失う直前に、巨漢……を従えていた少女に駆け寄つてくる一団を見たそうだ。

そのことはムウの下僕も証言している

「……待て待て……なんで貴鬼がでてくるんだ？」

ムウの下僕……というか弟子である貴鬼まきがそこでなぜ出でてくる？
あのオマケのガキは麻田眉一族の生息地であるジャミールにこもつてゐんじゃ……

「実はな、紫龍の聖衣は修理中でジャミールに保管されてあつたのだ。

それが突然飛んでどこかへ消えたので、あわててムウの下僕が紫龍の所にテレポートしたところ…

瀕死の紫龍と、せっかく修理したのに『死んだ聖衣』とそれを囲む奴らを見つけたのだそうだ。』

「……んで特徴は？」

「まず紫龍を襲った臣漢と臣漢を従える少女の他に……

白髪の男を従える黒髪の少女と、金髪の少女と赤い槍を持った青髪の男……の6名だそうだ。

戦つても勝ち目がないと判断した下僕は、紫龍を連れて聖域サンクチュアリへと逃げてきたのだ。

「賢明な判断だな。」

「厄介なことになつて来たな……」

つまりあれか……俺だけだと不安だからアフロディティーもつてこつか……

「本当は物理攻撃系の奴も派遣しようかとも思ったのだがな……生憎とそういう攻撃を得意とする奴らは感情のコントロールが出来ないからな。」

『保護』よりも『紫龍の敵打ち』を優先したら不味い……』

「確かに……」

シユラの奴も紫龍関係のことになるとアツくなるし、老師も弟子がやられたとなつたらアツくなるだろうからな……

獅子も蠍も脳みそ筋肉だし……ん？ならアルデバランはどうなんだ

？」

誰もが認める常識人の牡牛座のアルデバランの顔が浮かんできた。

「いや。アレは幻術に耐性がない。

敵に幻術使いがいた瞬間に、アレは終わりだ。」

「まあな……

まあ……メンドクセえ……んで、どこなんだよ、そこは?」

まあ……アフロディーテとなら大抵の敵への対策は出来るしな……
それに行先は……おそらく日本だ。

日本つと言つたら……娯楽あり食材あり……言つたりや悪いが聖域より
ずっと暮らしても快適だ。

たつた一人の小娘を保護するだけで、快適な生活が維持できるなら
文句言わずに向かつたほうがいい。

「……冬木市とこいつとこりだ。」

えつ……学校はつて？

『実は今日は土曜日なんだよな……転入してすぐ休みってなんだよ？
まあ……別にいいけど……』

『ようやく起きたか……主人。』

着替えが終わること……

ベットの側でこちらを見ている漆黒の龍……『ダーク・アーマード
ラゴン』がいた。

「……珍しいな……お前が姿を現すなんて……」

『ホルスから頼まれてな。』

『オイラは遠くから守護するから近場は頼む』ってな。』

……ホルスに何かあつたんだな……つまり。

そういうや、昨日……士郎に送つてもらつてるとき、やけに爆発音がし
てたけど……もしかしてホルスと誰かの戦闘だつたのかもな……
んで……傷ついて精霊化が出来ないって話か……

……つたく……心配かけたくないからつて嘘つくなつての。

アタシは食パンを加えながらジャケットを羽織った。

『……どこに行くつもりだ？』

「……ん？ああ……頑張っているホルスやアンタ達のために新鮮な魚を
仕入れに港へ行くのや。』

『港？……今から釣りか？

釣りというのは…もう少し早い時間ではないと……』

「大丈夫だつて。」

アタシは「イーーー」と笑つた。

「たぶん、誰か分けてくれそうな人がいると思うから。」

そう言つと、玄関の戸を開いた。

7話 時差つて計算するのめんどくさい（後書き）

花凜が起きた頃の衛宮邸では……

士郎「あれ？ 神代の奴…朝食食べに来ないのか？」

桜「そういえば…来てませんね。」

凜「まだ寝てるみたいだわよ。」

士郎「なんでそんなこと分かつたんだ？」

凜「キャスターに電話して、水晶を通して神代の様子を見てもらつたのよ。

もうグッスリだつたみたい。」

セイバー「あのキャスターが…よく話が通りましたね。」

凜「…こんな時もあるうかと、昨日…学校で葛木先生を何枚か盗撮してもらつたのよ…アーチャーに。」

十郎「なんでやー?」

凛「『アーチャーの目はタカの目』っていうみたいに目がいいから、かなり遠くからでも的確に写真が撮れるのよ。それに、『投影』でつくりだした…『Kとかが使いそうな最高級カメラ』ごめんなさいから、『ノボルもなし!』

ライダー「…ですが…自分で撮つた方が手間がかからないのでは？」

凜

アーチャー「マスターは機械オンチだからな。カメラが使いこなせないのだ。」

凛「あ…アーチャー…！何言ってんのよ…」

ズシンズシン！！！

アーチャー「いててて！！！」

照れ隠しに俺を蹴るのは止めてくれ！――！」

藤ねえ「あははーーー！」

なんだかわからないけど、愉快ねえ～～

土郎「なんでぞーっ！」

衛宮の朝は元気せいかである……

8話 サバに限りず魚つて新鮮なうちが美味しい

side 花凜 -

空は快晴

海風は頬に心地よく、ウミネコの鳴く声が寂しさを闇わせている……

文句のつけようもないロケーション……

午後の散歩を好む爺さんたちやマラソンを好むスポーツマンの清涼剤になりそうな冬木市の港……

しかし……

1人の暴力団関係者っぽい男によつて、人の寄り付かない、魔境と化していたのだつた……

でも、不思議と違和感がないのは何故だろうか……

まあ別にかまわない……アタシは自分の目的を果たすまでだ。

「ランサーさんだけ?釣りますか?」

声をかけると、4月末なのにアロハを着た男…ランサーがちらり…つとこちらを見て少し笑った。

「たしか…花凛嬢ちゃんだっだけ?
まあ…ぼちぼちってとこだなーー?」

「サバ山」、クロダイ4にカワハギ3つてとこだ。
「へえ……そんなに釣れるもんなんですか?」

ランサーは大きな欠伸をした後に、少し誇らしげに笑った。

「海なんだから種類多いのも当たり前なんじゃねエ?
…それにしては色々と混ざりすぎか……でも、まあ別に珍しいいい
いんじやねエか?」

いい加減な男だ……とりあえず前もって買つておいた缶コーヒーを
パスしてバケツを覗き込む。
確かにバリエーション豊かな魚が、狭いバケツの中をうごめいてい
た。

「…サバ多すぎですね。
「何だかしらねえけどな。」

つていうか、この時期つてサバの時期だっけ?

それよりも……

「……でずつと釣しているんですね？」

なんで『竿掛け』がないんだ……あつ……すみません……ないんですか？」

『竿掛け』というのは釣竿をひっかけるアイテムで、長時間釣りをしているときに必須だ。

釣竿って見かけによらず結構重い……それにわずかな揺れで獲物が逃げてしまうのだ。

そのために『竿掛け』……すなわち固定具は必須だと思つのだが……

「べつに敬語使わなくていいって。

『竿掛け』か？……あつたら便利なんだろうけど、俺にいらねえな。竿と糸とで様子を見るのが好きなんだよ。」

いやいや……好きだからって……

それが出来るアンタの両腕が凄いよ……力だけじゃなくて機械のごとき精密さと持続時間……

やはり一流の槍兵だからか？

「……それより、嬢ちゃんはどうしてここに？」

「あ～…新鮮な魚を仕入れたくて。

土曜日だし、だれか大量に連れている人がいたら譲つてもいらっしゃうと思つて……」

だが…この港にいるのはランサーだけだった。

「だからクーラーボックスを背負つてんのな……

分かつたよ、サバ1・2匹ならただで持つて行つていーぜ。コーヒ

ーの礼だ」

「あ…ありがとーー！ランサーさんーー！」

「へえ…君、魚欲しいの？」

今まで気配のなかつたところから人の声がした。
つてか…このボイスは…！…？…つと思い振り返ると…

(な…なんでアフロティーテがいんのーーーーーーー)

だれもが女と間違える黄金聖闘士（…とはいっても今は聖衣着用ではなく私服だが…）…魚座（ピスケス）のアフロティーテがほほ笑んでいたのだつた！！！

振り返るとそこにいたのは、この港に不似合いな美女だった。
つてかここまでの美女はそうそう目にかかるもんじゃねエゼ…!
?スカートはいてりやもつといいのによオ……

「えつと…お兄さんは何をしに?」

おい…花凛嬢ちゃんよオ…これのどこが男なんだよ?
すると、美女は驚いたように眉を持ち上げた…ほらな、怒られ…

「どうして私が『男』だと分かつたんだね?」

……はい?否定しねエのか?

「なんとなく…です。」

「…つてかマジで男かよ…こんな美人なのに…」

俺の言葉に力チンつときたのかもしけねえな。

美女…オツと間違えた、美男子は顔をしかめた。

「えつと…どうしてこちらに?」

「口の辺りで知り合いと待ち合わせしていてね。」

「…その…知り合いつてどんな人ですか?」

「そうだね……そこのお兄さんみたいな青い髪で、人相の悪い蟹みたいな男だよ。」

「どんな奴だよ！？蟹みたいて……想像つかねえ……」

「（蟹つて言つたら…デスマスク！？なんでこりこり……）
へえ……蟹みたいな人つて面白い表現ですね！！」

でも……なんでこんな港で待ち合わせなんですか？あ……聞いちやいけないならいいですけど……」

「実は仕事でね。これ以上は言えないんだよ。」

話せない仕事……か……最初は映画の撮影か何かかと思つたが……
殺し屋か？なんとなく強そうなオーラだしてゐるしな……

「……そうですか……。」

「それよりも君……腕の力が強いみたいだね。」

『竿掛け』も使わないで釣りをしているなんて……」

この美男子も花凜嬢ちゃんと同じことを言つてきました。

まあ……槍使いだからな。

「まあな。

こいつなら俺の仲間内で負ける気はしねえよ。」

「へえ……あつ……でも、アーチャーさんも釣りが得意そうな雰囲気

あるんだけど。」

「花凜嬢ちゃん…あの『ピーマ鹿』と一緒にしないでくれ。

あんな釣りという男の世界を知らねえような奴には負けねえって。

「口は災いの元だよ。」

花凜が心配そうに口にする。

へつ！ そうだとしても俺は釣で負ける男じゃねえっての…！

俺は大口を開けて笑つてやつた。

「平氣平氣。バレねえって。」

「お～い、待ったか、アフロ～～～！」

向ひから走つてくる不良風の男がいた。

……どこの蟹なのだかは分からぬが、青い髪の人物なんてそういうないから、おそらくアレがこの美男子が待つてゐるという人物だろう。

「アフロ？」

あ…花凜嬢ちゃんもそこ気になつてたか……どつからどひ見てもあの美男子はアフロじゃない。

髪はフツーに長いし…サラサラヘアだしな。

「ああ…私の愛称さ。

あまり好きではないが私の名前は『アフロティード』なのでね。」

「なるほどな……『美の女神』か……」

アフロディイー・テは苦笑すると懐から2輪のバラを取り出した。手品か！？と突つ込みたくなるくらい鮮やかな出し方だった。

「御嬢さんとお兄さんに口笛を上げよう。
連れを待つ退屈しのぎに付せ合ってくれた礼だ。」

それは深紅に染まつた美しいバラだった。
…正直、男から花なんでもらつたところで嬉しくもなんともない。
が、せつかくくれるといつので貰つたほうがいいのか？

「すみません……その……いりません。」

ためらいがちに…それでもきつぱりと断る花凜嬢ちゃん。
女つ氣ねえな…バラが嫌いなのか？
アフロディイー・テは少し顔をゆがめた。

「嫌いか？」

「い…いえ…バラは高貴で凜としてて好きですけど…
その…なんというか…毒とかありませんよね！？」
「待て待て待て、なんで毒なんだよ！？」

思わず突っ込んでしまった。いや……普通は毒なんてないだろ。たかがバラだぞ？

「なんか……直感！女の勘つて奴？」

「信憑性ねえな……ってか失礼だぞ。

初対面の相手に毒バラを渡す奴なんて……」

「……」俺は口を止めた。

「そつこえば……この嬢ちゃん自身はしらねえが、命を狙われてんだよな……」

昨夜、この嬢ちゃんの使い魔であり守護者……まあなんかのカードの精霊とか言っていたが……それが鎧の少年によつてボロボロにされてたのを思い出す。

鎧の少年の方はバーサーカーにやられて、仲間の少年の救援でどこかに行つてしまつたが……危険が去つたといつわけではない。

もし……こつらが嬢ちゃんの命狙つてる奴らだつたら……

「かつたるいな、アフロ。」

アフロディイーテが待つていた男がめんどくわづひに口を開いた。

「そつちの兄ちゃん気が付いてるみたいじゃねーカ。」

「……」

「ひやあ！？」

俺は釣道具を放り投げると、嬢ちゃんを抱えて2人と距離を取った。

「い……きなり何すんだよ、ランサー！？」

「わりいな嬢ちゃん。」

あいつらさ……嬢ちゃんを狙つてるみたいだ。」

「は……はあー？ ってか……まさかこいつ等がストーカーーー？」

いや……ストーカーって嬢ちゃんが言つてるのは昨日の少年だらうが黙つておくことにするか。

「ひでえな、ストーカーって……俺たちはお前さんを保護しに来たんだぜ？」

保護しに来たやつが、こいつの守護者を倒すのか？

「と言つてやりたかつたが、昨日の『ホルス』とかいう守護者が『主人には教えないでくれ』つと言つていたのを思い出し、何も言わないことにする。

「な……なんで……？」

「状況確認は後だ。嬢ちゃんはさつさと家に帰りな。

ここは……俺が食い止める……」

俺は瞬時に武装に切り替え、『サーヴァントのランサー』の姿に戻り、深紅の色をした刺し穿つ死棘の槍・『ゲイボルク』を構えた。

「う…ランサー？」

「説明している暇はない！行け！！！」

「隠密に済ませたかったが…仕方ない…舞え『ピラニアンローズ』」

「…」

アフロディイーテが黒バラを繰り出してきた。

そのバラはまるで意志があるかのように舞い…俺たちの退路を塞いだ。

やべえ……絶望的つてやつはひつひつとを言つのかもな……

そう思つた時だった。

ズドオオン！－！－！

突然、どこからともなく放たれた攻撃が黒バラを霧散させた。

爆炎が收まり「うさんさせた主が姿を出した時、俺はため息をつき

たくなつた。

「…虫の知らせがしてな。ビニールの駄犬より釣りの腕が良いという

ことを証明しに来たら……

ずいぶんと賑やかな祭り会場になつてゐるのではないか……ランサーよ。

」

そこに立つてゐたのは、高級釣道具を背負つてはいるが、弓を構えて
いる白髪に褐色の肌をした男サーゴヴァント……アーチャーだった。

9話 心臓を貫かれても一命生きていたアテナって凄い

side 花凜 -

……やばいやばいやばい……

つてかわ、なんでアタシ命狙われてんの！？
しかも、黄金聖闘士に……

とりあえず、あの場はアーチャーが助けてくれて…ランサーとアーチャーが黄金聖闘士の相手をしてくれている間に逃げてきたんだけど……

……氣になるから港までひっそり戻つてしまつていた……

『主人…逃げないのか』

『…せつかくあの2人が逃がしてくれたのに…なぜ？』

そう言つて姿を現した精靈は、『混沌の黒魔術師』と『ダーク・アーモドニアゴン』。

「…だつて…相手は人間規定外の強さをもつた黄金聖闘士だよ！？
たしかにサーヴァントも十分規定外の強さの持ち主だと思つけどさ

……

そつ言つて、こつそり木箱の陰から、先程までいたところをチラリ
… つと覗き見ると……

「『ロイヤルデモンローズ』……」

「つは！ そんなバラなんかに負けるかよ！ …」

アフロディーテの赤薔薇を、回転させた赤い槍で粉砕していくラン
サーの姿があつた。

……が……アーチャーの姿が見えない……。

同じくデスマスクの姿も見えないから……たぶん、デスマスクの技
『積尸氣冥界波』で冥界の入り口……『黄泉比良坂』に飛んでいった
のだろう。

『……………どうしたのだ、主？ 深刻な顔をして……』

「……いや……アーチャーもデスマスクも好きなキャラだから死なせ
たくないな……つて

同じことがアフロヒランサーにも言えるんだけどさ……」

Fateのキャラも魅力的で好きなキャラが多いけど、黄金聖闘士
だつて負けないくらい魅力的で好きなキャラが多い。
いや……デスマスクとアフロディーテは人気の少ないキャラでYa
hoo！の人気投票でも、あまり高くなかったけど……でも、『力
こそ正義』っていう信念や独特な戦闘スタイル……それに外伝であ
るLJCの彼らの前世である蟹座マニコルドと魚座アルハフィカを見て……それから一気に好
きになつたキャラ達だ。

……全員……ここで死なせたくない……

そう思つていると、混沌の黒魔術師がため息をついた。

『仕方ない……主のために一肌脱ぐじよひ……』

side アフロディイーテ

「……つぐ……なんだこれ……身体が……」

ようやく田の前の青髪青タイツの槍使いに魔宮薔薇デモンローズの毒が効いてきたみたいだ。

通常の人間ならもう少し早く効いてきてははずだったが……
姿からして『普通で無い』ようこそ、彼自身も『普通ではない』らしい。

とはいっても聖闘士のモノとは違つ『普通ではない』感じだ。

「身体が自由に動かせないのでどう?」

君は私の『ロイヤルデモンローズ』を全て粉碎していたが……いく
ら花弁を壊しても香りは多少は残るのだよ。」

「……つかしゃ……わつかの甘ったるい……臭いは……」

田の前の男は悔しそうな顔をしている。

さてと……このまま殺すか…それとも生け捕りにするか……

たぶん…相方のデスマスクの方は、さつき彼と対戦していた白髪の男と遊んだ後に、男を躊躇なく冥界の六へと突き落としているだろう。

だったら…殺すより生け捕りにして、情報を集めた方がいい。幸いにも毒は効いているみたいだし…

「……！」んな…といひで…負けるかよ……」

男が槍の持ち方を変えたようだ。……一体…あの動きにくらい身体で何をしようとしたのだろうか？

「『『ゲイ…ボルグ』！…！』

「…！…！？」

赤い槍が私目がけて襲い掛かってきた…！！

「はあ……はあ……」

先程までアフロディー^テがいた場所に土埃が立ち込めていた。

考えてみると、あの男勝りの嬢ちゃんを助ける義理は俺はない……でも……なんとなく『助けてやりたい』つと思わせる雰囲気っていうのがあるんだよな……

あのセイバーにも勝てるくらいなんだから、全然心配しなくて良さそうなのに……

……少しでも逃げる時間を稼いでやろうって思つちました。

だから俺の宝具『刺し穿つ死棘・ゲイボルグ』を使つた。これなら俺の身体の自由とお構いなく……俺の魔力だけで相手の心臓を突き刺すことができる。

「ほひ……面白い槍だね……」

「……？」

「ば……馬鹿な……なんで俺の槍を受けたのに……あの煙の向こうから声がするんだ！？」

その時……煙の匂いから黄金の光がチラリ……と見えた気がした。

……まさか……

あのセイバーが海に落とした……黄金の鎧を着た英雄王・ギルガメッシュの呪いか！？

「……はあ……はあ……『ゲイボルグ』って確か……サガが昔教えてくれた……けど……
アイルランドの『光の御子』が使う……槍……で……心臓を貫く……槍……だ
つた……はずだ……」

荒い息をしながら姿を現したのは……黄金の鎧を身にまとったアフロディーテだつた。

一応、『ゲイボルグ』は彼に当たつていたが、すんでのところで避けたのか、心臓から少しずれた……型の辺りが貫かれた痕跡があつた。

「……つべ……これでも……まだ立つてられんのか……？」

化け物かよ……人間だろ？……いつ……人間を越えた力を持つてるぜ？
そんな俺の驚きとは関係なしに、アフロディーテは俺の技から得た情報を考へているようだ。

「……君こそ……毒が効いているのに……まだ動けるとは……
『ゲイボルグ』を使えるということは……『ケルト神話』に登場す

る……光の御子……

『クー・フーリン』…………まさか……お前たちは『ケルト』の者か！？

『ケルト』の者が『アテナ』様を攫つたのか！？

……いや……確かに俺は『ケルト神話』に出てくる英雄だけよオ

他の奴らはケルトじゃねえし、そもそもアテナってギリシャ神話の

『戦勝の女神』だろ？

なんでそんな奴を『ケルト』が攫わねえといけねえんだ？

「…………だんまりか…………」

まあ構わない。……情報を得たところだ……そろそろ……お仕舞にしよ

う。

そう言って奴は一輪の白薔薇を取り出した。

「プラッディ・ローズ！――！」
「…………っ！」

一瞬で奴の手から放たれた白薔薇が俺の心臓を貫いたのだ。

「……」の技は……私流の……ゲイボルグ……といったところだ。
残念だった……みたいだな……

……………うへへしょ……………めわかし……んなどりひだ……

意識が……どんどん闇に沈んでいく……

わりく……せっかく受肉したのに……俺はもう退場みたいだ。
わたりと座へと帰るとするか…………たすがに嬢ちゃんもかなり遠くへ
…………

「ランサー…………」

……嬢ちゃんの声が聞こえた気がするが……気のせいだらうか?

声の方を向こうとしたとき……なにやら暖かい感じの空気が俺に触
れた。

「ば……ばかな……その小宇宙はー?」

なんか遠くでアフロディイーテの奴が驚いている声が聞こえる……
それと共に、身体が楽になつていいく……

ああ……俺は死ぬんだな

俺の意識は……

「ほら、馬鹿犬！！！起きろつて！！！」

「誰が馬鹿犬だ！！！」

ガバリッと起きて、声の主を殴る俺。

声の主は痛さを堪えた涙目で俺を見た。

「よかつた…それだけの元気があれば、ランサーはもう平氣だな！」

にっこりと笑う嬢ちゃんがいた。

……あれ？なんでこんなに意識がはつきりしてんだ？

9話 心臓を貫かれても一応生きとこしたアテナって凄い（後書き）

星矢「なあ、なんでランサーは『馬鹿犬』って呼ぶてたんだ？」

士郎「知らないのか？」

『ケルト神話』でランサー・クー・フーリンは『猛犬』って意味なんだ。」

瞬「……一応、修行時代に他の神話についても学んだと思ひナビ……」

星矢「俺はそんな覚えねえな。

魔鈴さんの生きるが死ぬかの修行の日々だったから……」

桜「な、なんか遠い日になつてますよ。」

氷河「ふ、修行時代か……懐かしいな……
わが師の教えは最高だつたな……」

凜「…………」つづいて意識がトロツプしてくるわよ。」

瞬「……気にしないでください……」

10話 黄泉比良坂つて神話だと桃の木があるのに、元気を見ても見当たらぬ

- side デスマスク -

……つたく……こいつ何者なんだよ？

俺は思いつきり後ろに跳躍して攻撃をかわした。

……俺が黄泉比良坂に連れてきた白髪に褐色の男は普通ではなかつた。

だいたいこの黄泉比良坂を見ても眉一つ動かさねエ奴なんて初めて見たぜ。

俺でさえ初めて「コ」に来たときには吐き気がしたのによお……

この禍々しい死の臭い……無氣力で虚ろな目を持つた死人の列……絶えず冥界の穴へと落ちていく人々の悲鳴……あまり心地よい場所とは言えない。

そんな場所にいきなりどばされてきたのにもかかわらず……目の前の男は淡々と俺だけを狙つてくる。

「つく……」

「つち……かすつただけか……」

俺にかすり傷を『えた白髪は、軽い舌打ちをした。

光速の速度で動く俺に、少しずつだが動きこついていくようなつてきている…

うへん小宇宙も感じねえのに……何者だよ一体…？

「つてめえ……名を名乗れ！－」

「名乗るほどの名なんて持つてはいないぞ。」

「……本当か？にじちやあ結構強ええじやねエか？」

奴の剣を避け光速拳を繰り出す俺。

「ぐつ……」

……一応まだ当たっているみてえだが……最初より見切られている…

少し遊んでやろうかなあーっとか思つて最初から致命傷を狙わなかつたのが仇になつたかもしれない。

今、致命傷を狙つた拳を繰り出しても、避けられてしまつだらつ…。

……いいつあ……百戦錬磨の剣士だ。こいつは奴相手にするなら俺よりもシユラとか獅子のガキの方が向いているつてんだよ。俺はあくまで『靈専門だからな……つて言つても一応肉弾戦は出来るし好きだけどな。得意つて程じやねえンだよ。

……何にしろ、このままだと完全に見切られるまでに時間がかかるな

いだろつ。

めんどくさいし、習得したばかりだから使い氣はしなかつたが……
仕方ない。

魂ごと火葬してやるか……

……最近習得した蟹座の奥義……

歴代の蟹座が操ってきた敵の魂を糧に鬼火を作り出す技……

俺は奴に向かつて指を向けた。

「積戸 気鬼……」

「そこまでだ……！」

鋭く低い声が響き渡つた……と思つたら、俺と白髪の間に人影が割り込んできた。

その人物は白髪より奇妙な格好をしていた。

黒髪にな帽子みたいなのがかぶつ正在……同じく漆黒の衣装を身にまとつてゐる。

なんか杖みたいなのを持つてゐるし……顔が蒼いし……って……

なんだよ、蒼い顔つて……

「……人間……じゃねえな。何者だ……？」

「……吾は『混沌の黒魔術師』。主の命により、戦いの休止とアーチャー殿の救出に参つた。」

「……俺は助けを頼んだ覚えはないんだがな。」

ムツとしたような感じで白髪…アーチャーは『混沌の黒魔術師』をにらんだ。

が、魔術師は平然とした顔を崩さない。

「……悪いが……吾は主に逆ひつつとは出来ない。

このまま引かせてもうおいつ。」

魔術師はクルリ…と杖を一回転させると姿を消した……アーチャーとかいう白髪と一緒に……

「つむり…逃げやがったか……」

……アレは…アイツらは人間なのか?

いや…俺たち聖闘士も人間とは言い難いけどよオ…………まつ…一回は取り逃がしたが、俺たちの目的はあいつらじやない。目的は神代花凜とかいう嬢ちゃんだ。

俺は黄泉比良坂から出て、もとの小せえ港に戻ってきた。

…………そこには……

「アフローー?」

黄金聖衣を纏つて倒れていた友人の姿があつた。
アフロティーテ
つてか…聖衣が血まみれじやねエか!!

「おい!!しつかりしゃがれ!!」

「……耳元で煩い…もつと静かにしろ、蟹。」

うつすらと田を開けたアフロディー^テ。
多少呼吸は荒いが、命に別状はなさそうだ。

「まつたく……弱きものは放つて置くのが道理といつものではないのか?」

「そりゃそうに決まつてんだろ?」

だがよ……テーマを放つて置いたらウルセ^エ奴らがいるだろ。
……で、誰にやられた?」

それを聞いたアフロの奴は苦しそうな顔をした。

「…致命傷を打えたのはランサーといつ先程の全身青タイツの男だ
が…

私を動けなくさせたのは、花凜といつ少女だ。」

「……はあ?」

何言つてんだよ……あんななんの能力もなさそりゃ嬢ちゃんに……?
つてか保護対象じゃなかつたのか！？

「……動けるようになるまでにはあと数刻…といったところか……
そうしたら一度、私は聖域に戻る。調べなければならないことがあるのにな。」

その時、俺は気づいたことがあった。

確かにアフロの奴の聖衣は血まみれだし、心臓に近い辺りに穴が開いていた。

しかもそこから致死量に達するかもしれないほどの血が噴き出した
ような跡があつた。

なのに……今はすっかり止血して、こんなに出血する傷口があつたとは思えなくなつていたのだった。

つまり誰かが治療したといつこと……

しかも……このレベルともなると、アフロティーテ本人が痛みと戦いながら、ここまで完全に治癒できるとは思えない。

……一体誰が……

問い合わせようとしたとき、アフロティーテは深い眠りに落ちて行ってしまった……

…まあ寝息立ててるから生きてんだろ。

「つたく…男背負う趣味ねえのにな。」

俺はアフロ、ティーテを背負うと、土曜のくせに人のいない、港をあとにした。

10話 黄泉比良坂つて神話だと桃の木があるのに、ルリを見ても見当たらぬ

星矢「ハッピーバースディ!!俺!!!!

プレゼントで…もらつたぜ!!…さつそく『タイガー』ころしあむ
をプレイするぜ!!

そのあとは何しようかな…!!あ…その前に、菓子準備ねえとな
!!

菓子食べながら暖かい部屋でゲーム…「うん…最高だな!!」

士郎「テンショノ高いな…」

紫龍「…違うな…無理にテンショノを上げているのだろう。
せつかくの誕生日なのに出来がこのコーナーしかないのだからな。」

凛「私達はほととじのキャラの誕生日が明らかになつていないから、
その点は気楽でいいわよね。」

紫龍「とにかく…そのゲーム機は誰にももらつたんだ?」

星矢「いいだろ…!!沙織さんがくれたんだぜ!!」

士郎「……く……くえ……よかつたな!!

(……あ……あれって……)の間、慎一が売つてた奴にそつくつだ…)

桜「よかつたですね……(あれって……兄さんが使つていたP Pじやあ……)」

ライダー「『知らぬが仏』といつものですね、マスター。」

星矢「?なんのことだ?」

凜「気にしなくていいわ。」

星矢「?まあいいや……ってかわーーその……お前たちは……」

士郎「……そうだ!!今からバイトが入つてたから帰る……」

桜「あ……私も部活が……」

紫龍「……すまんな……春麗に早く帰らないと小言を言われるのでな。」

星矢「……」

「その頃、星の子学園では

美穂「星矢ちゃん、せっかく誕生日パーティーの準備しているのに
……」

星華「……きっと、他の所でお友達と一緒にお祝いしているんですよ。」

美穂「……そうね……仕方ないからこのケーキは食べちゃいましょう。」

星矢「……せっかくの誕生日なのに……」

12月1日は主人公の星矢の誕生日

「……だが、今年は一人で迎えるようである……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6434y/>

Fate/Gold Saint 黒炎の姫君

2011年12月1日13時53分発行